



朝日子だより

吉田高校 進路指導部
H21.9. 発行
学生編 Vol.4

吉高生のみなさんへ

後輩のみなさんにあてて、大学の様子や、どういった研究をしているのか書きました。是非最後まで読んで、進路を考える上での参考にしていただければと思います。

小佐野 慧太 (平成 16 年度 理数科卒業)
早稲田大学第一文学部
総合人文学科東洋哲学専修 在学中



現在学んでいる内容は・・・

僕は今、早稲田大学の第一文学部というところに所属しています。現在では「文学部」と「文化構想学部」という二つの学部改編されています。僕の専門とする学問は「東洋哲学」です。仏教や儒教、道教や神道といったものを学んでいます。「東洋哲学」云々は特殊ですのでさておいて、ここでは「文学部」進学に興味を持っている方々の進路選択に資するようなことを、少し書いてみたいと思います。

「文学部不要論」というものがあります。「文学」なんていうものは一種の道楽であり、学問として国が助成金などを出して面倒を見るようなものでもない。学部としても無用の長物なのではないか、という意見です。この見方は、皆さんの中にも根強くあるのではないかと思います。しかし、実際にその学部の中にいる者にとっては、こうした意見に対しては異議を唱えたくありません。



その理由としてはまず一点目に、「文系の学問のほとんどは、思われているほど役に立つものではない」ということが挙げられます。一見、役に立つことが学べそうな学部筆頭の法学部ですが、これとても例外ではありません。それは現在、多くの法学部生がそれらを志望する文学部生と混じって、公務員試験や法科大学院、司法試験のための「セカンドスクール」に通っていることを考えても明らかでしょう。「隣の芝生は青く見える」なのかもしれませんが、「こんなことなら法学部ではなく、自分のやりたい学問をやる学部に進んでおくんだっ...」という怨嗟の声を、僕はいたるところで耳にしてきました。方や一般企業への就職に目を移しても、一部金融業界を除けば、文学部生だからといって忌避されることはまずあり得ません。文学部に進学したからといって、ほかの学生に人生で後れを取る、ということにはならない。自分の学びたい学問を学ぶということ、これが一番なのです。(勿論「法学」が自分のやりたい学問ならば、法学部に進むことに何ら問題はありません。)

二点目としては「文学部で学べることに役には立つことは多い」ということが挙げられます。たとえば「社会学」なんていう学問は文学部で学べます。が、これは世の中の動きを理論や分析を通して見つめることができる非常に実学的な学問です。それだけではありません。僕が学んでいるような「哲学」も、ただ単に思想家の奇妙奇天烈無意味無効な言葉や著作を有り難がっているわけではない。哲学は理性や論理に基づいて推論が行われるわけですから、そうした学問を探求することによって「論理的思考」や「問題発見力」などが養われるわけです。

以上二点が、「文学部不要論」に対する反論ということになります。

しかし何よりも「文学部」というのは、本来の意味からすると「教養学部」と言ったほうが正しいのかもしれませんが。「教養は何故必要か?」という問いもあることでしょう。僕の見解は、一度きりしかない人生を「酔生夢死」に終わらせないために必要なのではないかと、いうものです。「ただ生きるな、よく生きろ」とは古代ギリシアの哲学者プラトンの有

有名な言葉ですが、この「よく生きる」ということのためには、やはり広範な知識、すなわち「教養」が必要なのではないかと僕などは思うわけです。そしてこうしたことを、僕含め多くの文学部生は探究しているわけです。僕自身は、文学部に入学して、さらに就職活動を終えた身ですが、文学部に入学したことへの後悔は全くありません。上述のような理由で文学部進学に引け目を感じている方がおられるのであれば、そういった戸惑いは杞憂に過ぎない、ということ再度言っておきたいと思えます。



大学の様子

大学時代にすべきことの上位に「人脈作り」を挙げる人も多いですが、早稲田大学には全国各地から様々なタイプの人が集まってくるのでその点に関しては最適な場所と言えます。サークルも数千団体もあると言われており、アニメ・漫画や、音楽などをはじめとして、文科系のマイナーな趣味を有する人でも必ず仲間を見つけることができる環境なのです。色々な人間が同門に集い、自らと全く異質な「他者」との出会いが、「自己」をさらに高める契機となる...そんな経験も、大学生活ならではの醍醐味だと付言しておきたいと思えます。

「出会い」ということに関連させて続けると、早稲田大学は講演会などで著名人と接する機会が多い大学です。大物だと、去年は中国国家主席の胡錦濤さんがチベット問題のさなかに来校、講演を行いました。他にも小説家や政治家が大勢大学にやって来ます。また、講義を受け持つ教授や講師にも著名人が多く、ジャーナリストの田原総一郎さんや、北朝鮮問題の専門家の重村智計さん...最近ですと作家の佐藤優さんなどが早稲田大学で講義を持っているのです。「人に会うなら早稲田」であると思えます。

特筆すべきなのは「図書館」です。他大の図書館の場合ですと、ある程度貴重な本は面倒くさい手続きを経ないと手にとって眺めることができません。その点、早稲田の図書館は大変便利なのです。早稲田大学中央図書館はその広大なフロア面積により、殆どの書籍を自ら手にとって眺めることが可能になっています。大学OBのライターや小説家ですら、この図書館を大変便利だと言ってよく利用しているようです。僕自身も、地元の郷土史である『勝山村史』を図書館で

目にしたときは「こんなものまであるのか」と感動してしまいました。

最後に、早稲田大学は新宿区に存在しているのですが、やはり学生にとっては東京都内で生活ができるということは大きな魅力だと思います。中央線沿線や、古書店街のある神田神保街などを気が向いたときに散策できるというのは、他県に住む文系学生にとっては、かなり魅力的なのではないでしょうか。

人、設備、立地...この三点において、早稲田大学は大変恵まれた大学であるといえます。



勉強のハード面ですと、「早稲田は勉強に打ち込める環境ではない」という言葉を僕は入学する前によく耳にしました。しかし、現実とは逆。全くそんなことはありませんでした。他大学からの出張で講義に来る先生からも、「早大生は授業中も静かだ」という言葉をよく耳にするほどです。単位の認定も厳しくなっていますし、出席も次第に成績に勘案されるようになってきています。

また、入学して意外だったのは「高校の時の勉強が意外に役に立つ」ということです。理系は言うに及ばずかもしれませんが、文系とて例外ではないのです。例えば高校の世界史では「ウェストファリア条約」というものを覚えさせられます。この条約は、「政治学」や「国際法」などを語る時には欠かすことができないものです。また、日本史や倫理の授業では山崎闇斎や平田篤胤という人物を少し勉強すると思えますが、この二人の思想の影響により、日本人は明治維新を成功させ、さらには先の大戦へと巻き込まれていったと考えることもできる。一見些細な知識が、「戦争」というアクチュアルな問題を考えるための一つのポイントにさえなるのです。大学で勉強をしていると、「ああ、だからあの人物や事件は覚えなければならなかったんだ」とハッとさせられることが多い。以上はほんの一例ですが、大学での勉強を進めるための基礎知識としても、世の中を考えるための一般教養としても、高校で学んでいる内容というのは大変意義のあるものだ、僕は実感しています。



高校と大学の違いは・・・

大学では「問題を自分で発見しなくてはならない」ということが大きいかと思います。高校生までは「問題」が予め与えられて、それを必死に考えて解けばいいわけです。しかし、大学の勉強というのは、「問題」を発見するところから始めなくてはいけない。大学では学問を中心にやろう、と思っている方は、高校生のうちから授業などで疑問点を見つけ、自分で考え、わからなければ先生に質問に行く、という自発的な学びの姿勢を大切にしてください。多くの人が感じることだとは思いますが、大学生は自由です。ただし、この自由を生かすも殺すも皆さん次第なのです。「指示待ち人間」では、充実した学生生活すら送れません。僕などは在学中に、毎日一冊のペースで人文科学、社会科学の新書や学術書を読み続けましたし、いくつかのサークル活動に熱を入れるなどしていました。皆さんも大学生になったら是非、あれやこれやと試行錯誤をしつつ、主体的に行動なさってみてください。「夢」や「将来設計」といったものは、高校生ではなかなか持てるものではありません。皆さんには、そうした大学の「自由」を利用して、多くの「他者」や、内なる「自己」と対話し、「確固たる我」の構築に励んでもらいたい。そうした過程で初めて、先述した「夢」や「将来設計」というものが見えてくるのではないのでしょうか。(その点、理系の方は選んだ学部学科がほぼ「生業」と直結しますので、進路選択の際には先生とよく相談するなどして慎重を期すことをお勧めします。)



大学卒業後の進路

大学全体として「様々」です。官僚や弁護士になる人もいれば、民間企業に就職する人もいます。学生時代からやっていたベンチャー企業に本腰を入れる人もいますし、芸人や俳優、作家になる人もいます。その中で、巷間言われているのは、「早稲田はマスコミに強い」ということです。実は僕自身も既に、とある新聞社から内定を頂いているのですが、やはり周りにもテレビ、出版、新聞、広告業界を目指す人は多いように思います。

ただし就職活動の際には、大学時代に何をやってきたか、ということが問われます。良い大学に入ったからといって良い会社に入れる、という保証は今や殆どありません。そうは言っても困惑する必要はなく、要は大学生活の中で、何か一つでも一生懸命に打ち込んだ経験があれば、この就活というのはなんとかなるものです。もちろん、英語やPCなどの技術は、「ツールとして」身に付いているほうが良いに決まっています。

吉高生へメッセージ

吉田高校の校訓は、ご存知かと思いますが「百折不撓」というものです。我々の住む郡内地方というのは、四方を山々に囲まれた閉鎖的な土地であり、なおかつ耕地面積も少ない、大変に住みにくい土地です。近代に入ってから、商いとあっては御坂を越えて織物を国中に売りに行き、国中から流れてくる非常に少ない穀物で飢えをしのぎながら暮らしてきたのです。しかし、それにもかかわらず、我々の先祖は、この郡内の地を生活の拠点とし生きてきたわけです。これぞまさに郡内地方に住む者の「百折不撓」の精神の現れであると、僕は思います。

勉強というものは本来楽しいものである、というのが僕の持論なのですが、時には辛いこともあるかと思います。そんなときは、上述のような我々の先祖の歩んできた道のりを思い、その「百折不撓」の精神が皆さんの血の中にも流れているということを強くイメージして、自らを奮い立たせてください。一念発起して、そして勉学に励んでください。



経験則として、「良い大学」になればなるほど、教授、同輩ひっくるめて「凄い人」、「面白い人」が沢山やってきます。正直な話、早稲田なんかよりも、東大のほうが面白い人は多い。本を読むことも確かに重要ですが、人は人と会うことによって数段向上するものです。その為にも、やはり「良い大学」は目指した方がいい。僕はそう

思います。